

Title	アイロニー発話の意味の性質
Sub Title	La nature du sens de l'énoncé ironique
Author	西脇, 沙織(Nishiwaki, Saori)
Publisher	慶應義塾大学フランス文学研究室
Publication year	2016
Jtitle	Cahiers d'études françaises Université Keio (慶應義塾大学フランス文学研究室紀要). Vol.21, (2016. ) ,p.33- 49
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11413507-20161201-0033">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11413507-20161201-0033</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# アイロニー発話の意味の性質

西脇沙織

## 1. はじめに

本稿のテーマはアイロニー発話の言語学的分析である。アイロニーとは、*Le Petit Robert 2015* などのフランス語辞書や Fontanier (1827/2009) などのフランス語レトリックの概説書において、誰かや何かを批判したりからかったりする目的で、あることを言っただけでその反対のことを伝えることだと定義されている現象である。発話とは、個別の状況において実際に使用された文のことである。一般に、フランス語学においては、発話の意味の中には少なくとも2つの要素が存在すると考えられている。内容 (contenu) と発話態度 (énonciation) である<sup>1</sup>。発話を構成する語彙の意味に由来する部門を内容、内容に対する話者の判断や評価等に由来する部門を発話態度と呼ぶ。本稿でもこの区別を踏襲する。アイロニー発話の意味の中にも内容と発話態度の2要素が存在するが、フランス語学の分野ではアイロニー発話は発話態度の性質により定義される現象であるという仮説が支配的である。アイロニー発話の話者は内容に対して何らかの形で距離を取る (distanciation) ものだと考えられており、この話者による距離の取り方をどのように記述するのが最良であ

---

<sup>1</sup> énonciation には定着した日本語訳がない。本稿では、発話の意味のうち内容と対立する部門、話者の態度に由来する部門、という意味で énonciation を用いている。そのため「発話態度」を訳語として採用した。しかし、énonciation は、発話が特定の時間・場所で用いられること、そのような事実・出来事そのもの、発話の出現そのもの、という広範な意味で用いられることもある。énonciation をこの広い意味で用いるならば、「発話事実」あるいは「発話事象」、「発話事態」などの訳語がふさわしい。

るかということが主要な論点になっている。例えば、Sperber et Wilson (1978), (1989) に従うと、アイロニー発話の話者は誰かの発話をエコーのように繰り返しながら、その内容に対する乖離的な心的態度を表現するとされる。また、Ducrot (1984), (2010) によれば、アイロニー発話の話者はアイロニー発話の内容を自ら構想するが、その内容を後続の言説の中で展開することを禁じるとされる。本稿の筆者は、アイロニー発話の中心にあるのは発話態度であるとするこれらの考えとは逆の仮説を提案している。アイロニー発話の本質は内容にあり、発話態度の性質は内容の性質の帰結に過ぎないという仮説である。筆者はこれまで、西脇 (2015)、Nishiwaki (2015), (2016a) において反語法を用いたアイロニーと誇張法を用いたアイロニーを分析し、上記の仮説を主張してきた。本稿は、アイロニー発話全般について同様の視点から論じた Nishiwaki (2016b) の要点を日本語で簡潔にまとめて紹介するものである。詳しくは Nishiwaki (2016b) を参照されたい。

## 2. 問題

次にあげるのは、2012年度のフランス大統領選挙戦中に観察された発話である（下線は筆者）。

(1) [選挙戦を有利に進めることができていなかった候補者のニコラ・サルコジが気落ちしている側近を皮肉っている] « Vous avez l'air enthousiaste, vraiment ! », a plaisanté Sarkozy en entrant dans le salon vert de l'Elysée. Détendu et blagueur, il a moqué les « petites mines » de ses collaborateurs. (*Le Figaro*, 21-04-2012)

(2) [同じく候補者のフランソワ・オランドが選挙の支持率調査において自身を追い上げてきたニコラ・サルコジをからかっている] Dans les enquêtes d'opinion, les intentions de vote continuent de fléchir lentement pour Hollande. Il ironise sur ces rebonds du président-candidat : « Parfois, il reprend confiance parce qu'à la lecture de certaines enquêtes, il serait battu moins nettement que prévu. » Puis il s'en sert pour remobiliser son camp : « Quand je le vois plastronner, je me dis : "Battons-nous. Rien n'est acquis". » (*Le Figaro*, 07-04-2012)

(3) [討論番組に出演したニコラ・サルコジが後に女性暴行事件を起こすことになるドミニク・ストロス=カーンを大統領に推していたとして、ロラン・ファビウ

スを批判している] Fabius a reproché à Sarkozy de ne pas avoir été « en ligne avec la tradition républicaine ». « Je n'ai pas beaucoup de leçons de style à recevoir de quelqu'un qui militait pour que Dominique Strauss-Kahn soit élu président », relevait Sarkozy, s'attirant en réponse un « bravo pour votre élégance » de la part de Fabius. » (*Le Figaro*, 07-03-2012)

一見したところ、(1)-(3) はどれもアイロニカルに感じられる。しかし、機知に富んだ言葉による攻撃であるという以外に共通点は見当たらない。あることを言ってその反対を伝えるという辞書・辞典のアイロニーの定義は (1) には当てはまりそうだが、(2) と (3) には当てはまりそうもない。また、アイロニーに関する先行研究が想定している話者が内容に対して距離を取るといふ現象も (1) では観察されるが、(2) と (3) に関しては微妙である。(1) では、側近が落ち込んでいるというネガティブな状況を側近が元気いっぱいであるというポジティブな状況として提示する矛盾した内容を主張するふりをする (*faire semblant de soutenir*) のがアイロニーの原因であるように見える。それに対して (2) では、支持率調査の結果を見てニコラ・サルコジが悲しいではないという状況、大喜びしている状況として提示する大袈裟な内容を主張している (*soutenir*) のがアイロニーの原因であるように思われる。さらに (3) では、ロラン・ファビウスから教わることは何もないという状況を、教わることは多くないという状況として提示する控え目な内容を主張しているのがアイロニーの原因であるように感じられる。このような違いにも関わらず、なぜ (1)-(3) はどれもアイロニー発話であるように感じられるのだろうか。(1)-(3) をアイロニー発話であるとすると、(1)-(3) の間にはどのような言語学的類縁性が存在するのだろうか。以下、Anscombe et Ducrot (1983) の言語内論証理論 (*Théorie de l'Argumentation Dans la Langue*) の最新形態である Carel (2011a) の意味論的ブロック理論 (*Théorie des Blocs Sémantiques*) 及びDucrot (1984) によるポリフォニー (*polyphonie*) 研究を進化させた Carel (2011a) の論証的ポリフォニー理論 (*Théorie Argumentative de la Polyphonie*) を援用し、(1)-(3) の発話の意味を記述することによって、様々なアイロニー発話の間に存在する言語学的類縁性を探っていくことにする。

### 3. 理論的枠組

#### 3.1. 意味論的ブロック理論<sup>2</sup>

意味が内容と発話態度に分かたれることはすでに述べた。意味論的ブロック理論はこの2部門のうち内容の方を担当する意味理論である。一般に、ある発話は何らかの内容を持つ。意味理論によって内容の属性をどう捉えるかは異なる。例えば、指示的意味論では、発話の内容は世界や事物の状態であるとされる。これに対して、意味論的ブロック理論では、論証の概念を駆使することで、発話の意味内容をより正確に、そして明瞭に記述することができると考えている。具体的には、発話の内容は論証的相 (aspect argumentatif) と論証的連鎖 (enchaînement argumentatif) によって構成されると考える。論証的連鎖とは、*donc* 及びそれに類する接続詞あるいは *pourtant* 及びそれに類する接続詞で結ばれた2つの文からなる言表である。論証的相とは、論証的連鎖の解釈を示す理論的概念で、*X DC Y* あるいは *X PT Y* の形で表記される。DC は *donc* 及びそれに類する接続詞の一般化、PT は *pourtant* 及びそれに類する接続詞の一般化、*X* と *Y* は任意の要素である。発話をまるごと論証的連鎖によってパラフレーズし、それに発話の中の単独あるいは複数の表出語・表現 (terme expressif) により決定される論証的相を添えることによって、発話の意味は記述される。また、論証的連鎖は論証的相の具体化、論証的相は論証的連鎖の抽象化という関係にある。

なお、意味論的ブロック理論の強い仮説では、あらゆる発話は論証的連鎖によって書き換えることが可能であると主張しているが、弱い仮説では一部の発話は論証的連鎖によって書き換えることが可能であるとするにとどまっている。(1)-(3) の発話を分析するには弱い仮説があれば十分なので、本稿では弱い仮説を採用することにする<sup>3</sup>。

---

<sup>2</sup> 3.1. 「意味論的ブロック理論」に記載の例文 (4)-(15) は、Carel (2015) によるものである。ただし、(6) と (7) は一部改変した。

<sup>3</sup> とはいえ、論証的書き換えが不可能であると証明された発話は1つも存在しないことを強調しておきたい。Carel (2011a) が示しているように、*Il y a un MUR.* の

以上を踏まえた上で、具体例を見てみよう。(4) の発話の内容は (5)、(6) の発話の内容は (7)、(8) の発話の内容は (9) によって記述される。なお、一般に、論証的連鎖は斜字体で、論証的相は大文字で記される。

(4) Pierre est INTELLIGENT.

(5) *même si c'est difficile, Pierre comprend* ; DIFFICILE PT COMPREND

(6) Ce film est MONOTONE.

(7) *ce film est uniforme, donc ennuyeux* ; UNIFORME DC ENNUYEUX

(8) Mon fils a FUI le DANGER.

(9) *c'était dangereux, donc mon fils a fui* ; DANGER DC FUIT

発話全体と論証的連鎖は意味論的等価、類義の関係にあり、論証的相が連鎖の解釈を示す。論証的相は発話の中の大文字で示されている表出語によって与えられる。(5) DIFFICILE PT COMPREND は *intelligent* の、(6) UNIFORME DC ENNUYEUX は *monotone* の意味に含まれる論証的相である<sup>4</sup>。また、(9) DANGER DC FUIT は *fui* と *danger* の統語論的隣接性により生まれた論証的相である。

別の例を見てみよう。(10) の発話の内容は (11)、(12) の発話の内容は (13)、(14) の発話の内容は (15) である。

(10) Marie a eu la PRUDENCE de redescendre avant l'orage

---

ような一見論証的書き換えが不可能に思える発話でさえ *il y a une raison pour qu'il y ait communication, pourtant il y a séparation* ; COMMUNICATION PT SÉPARATION と記述することができる。

<sup>4</sup> 形容詞 *intelligent* の唯一無二の意味は DIFFICILE PT COMPREND であり、形容詞 *intelligent* を含む全ての発話の相は DIFFICILE PT COMPREND によって解釈されるという趣旨ではない。(4) の発話の個別の文脈において、連鎖 *même si c'est difficile, Pierre comprend* を解釈する相としてふさわしいのは DIFFICILE PT COMPREND であり、この相は発話に現れている形容詞 *intelligent* の意味の一部(ある 1 つの語は複数の異なる論証的相を意味として持つ) からやって来たという趣旨である。(4) 以外の例文についても同様である。

(11) *il allait y avoir de l'orage, donc Marie est redescendue* ; DANGER DC PRÉCAUTION

(12) Madame Martin avait PEUR : elle pensait au fait d'être vue et du coup rougissait.

(13) *madame Martin pensait au fait d'être vue et du coup rougissait* ; PENSER À UNE SITUATION DÉSAGRÉABLE DC SENTIMENT DÉSAGRÉABLE

(14) Tiens, le GENTIL petit garçon de l'autre jour est en train de piétiner les plantes de la voisine.

(15) *le petit garçon est gentil, pourtant il est en train de piétiner les plantes de la voisine* ; GENTIL PT FAIRE DU MAL

発話全体と論証的連鎖は言い換えの関係にあり、論証的相が連鎖の解釈を示す。論証的相は発話の中の大文字で示されている表出語によって与えられる。

(11) DANGER DC PRÉCAUTION は *prudent* の意味に、(13) PENSER À UNE SITUATION DÉSAGRÉABLE DC SENTIMENT DÉSAGRÉABLE は *peur* の意味に、(15) GENTIL PT FAIRE DU MAL は *gentil* の意味に、それぞれ含まれる論証的相である。

ところで、(4)-(9) では、論証的相の中に現れている要素が論証的連鎖の中に現れている語と一致しているが、このような構造は単純構造 (*construction simple*) と呼ばれる。この場合、発話を構成する語のうち、論証的相を決定する表出語以外の語は、論証的相の忠実な復元物として論証的連鎖を形成しているに過ぎない。論証的連鎖と論証的相がそれぞれ具体化・抽象化の関係にあることはすでに述べたが、単純構造の論証的意味内容においては、両者の間にギャップ (*décalage*) はないと考えられている。(10)-(15) では、論証的相の中に現れているすべての要素のうち、論証的連鎖の中に現れている語と一致していないものがあるが、このような構造は複雑構造 (*construction complexe*) と呼ばれる。この場合、発話を構成する語のうち、論証的相を決定する表出語以外の語は、論証的連鎖の形成において決定的な役割を持ち、論証的相は発話の話題の主眼を、論証的連鎖は発話の話題の細部を与えるとされる。複雑構造を取る論証的意味内容は論証的連鎖と論証的相の間にギャップがあると考えられている。とはいえ、通常の複雑構造の意味内容におい

ては、論証的連鎖と論証的相の間には正常な具体化・抽象化の関係が成り立っていることに注意が必要である。後述するように、複雑構造はアイロニー発話成立のポイントになる。

### 3.2. 論証的ポリフォニー理論<sup>5</sup>

意味論的ブロック理論が内容を担当する意味理論であるのに対し、論証的ポリフォニー理論は発話態度を担当する意味理論である。フランス語学において、発話態度はしばしば話者の心理状態に結びつけられる。しかし、話者の正確な心理状態は話者にしか知りえない。論証的ポリフォニー理論は、話者が内容に対してどう思っているかということではなく、話者が内容をどのように言説の中で使用するのかということが発話態度だとしている。具体的には、ある内容には何らかの談話機能 (*fonction discursive*) が 1 つずつ割り振られていると考えている。ポリフォニーという言葉が示すように、ある発話の中に複数の内容が存在することは可能である。それに対して、内容が複数の談話機能を持つことはできないのがポイントである。

論証的ポリフォニー理論において、ある内容に談話機能を割り振るとは、その内容が言説の中で果たす役割に制限を課すということである。談話機能には前景化 (*mettre en avant*)、背景化 (*mettre en arrière*)、排除 (*exclure*) の 3 種類がある。前景化とは、ある内容を後続の言説において発展させることである。背景化とは、ある内容を後続の言説において直ちに発展させることはないが、言説の流れの中でその内容と別の内容との間に矛盾を生じさせることもないことである。排除とは、ある内容をそれに引続く言説の中で発展さ

---

<sup>5</sup> 3.2. 「論証的ポリフォニー理論」に掲載した例文 (16)-(21) は、Carel (2011a) から援用した。ただし、(17) のみ一部改変した。なお、論証的ポリフォニー理論には出現様式 (*mode d'apparition*) という話者がどのように内容を構築したのかを記述するパラメーターが存在する。本稿では、(1)-(3) の発話において話者が内容を主張しているかいないかが主な問題であり、これを議論するには談話機能のみで十分なので、出現様式については触れないことにする。アイロニー発話の出現様式については、稿を改めて論じたい。

せることを禁止することである。また、排除された内容は後景化された内容  
と異なり、言説の流れの中で矛盾を生じさせる可能性があることに注意が必要  
である。なお、談話の流れの中で反論されえないという点で、前景化と背  
景化された内容は主張された内容であるとされ、両機能をまとめて肯定的機  
能 (*fonction positive*) と呼ぶ。反対に、談話の流れの中で反論されうるとい  
う点において、排除された内容を主張するのは不可能であり、排除は否定的  
機能 (*fonction négative*) と呼ばれる。以上を踏まえた上で、例を見てみよう。

(16) Il fait beau ; profitons-en faire un pique-nique.

(17) Le muret du jardin était en pierres.

(18) Il ne fait pas beau.

例えば、(16) の発話の中には、天気が良いという内容が読み取れる。この内  
容は、直後の *profitons-en faire un pique-nique* によって言及され、発展されて  
いるので前景化されているということになる。(17) は前提 (*présupposition*) に  
関わる発話である。前提された内容 (*contenu présupposé*) は直後の言説によ  
って発展させられることもないが反論もされえないので、背景化された内容  
の最たる例である。(17) の発話からは、庭の塀は石造りであったという内容  
のほかに、庭には塀があったという前提された内容も読み取れる。このうち、  
庭には塀があったという前提された内容は言説の中で直ちに展開されないが  
矛盾をきたすこともないため、背景化されていると言える。(18) は否定発話  
(*énoncé négatif*) である。一般に、否定発話においては、肯定の内容 (*contenu  
positif*) と否定の内容 (*contenu négatif*) の両者が示されると考えられている。  
否定発話の中の肯定の内容は直後の言説によって発展させられることもない  
ばかりでなく、その後の言説の展開において反論されうるので、排除された  
内容の典型例であると言える。(18) の発話からは、天気が良いという肯定的  
内容と天気が良くないという否定的内容が読み取れる。このうち、天気が良い  
という肯定の内容は、言説の中ですぐに発展させられることもないが、反  
論されうる可能性はあるので、排除された内容である。

Carel (2011b) は、複雑構造の意味内容はアイロニー発話を可能にする要因であるとし、論証的連鎖と論証的相の間のギャップが不合理なもの (*décalage absurde*) となった時、内容が排除され、アイロニー発話が生まれると主張している。これに対して、本稿の筆者は、複雑構造の意味内容がアイロニー発話を可能にする要因であるという説は維持するが、論証的連鎖と論証的相の間のギャップがただ単に奇妙なもの (*décalage bizarre*) になった時、アイロニー発話が生まれてくると考えている。また、ギャップの重大さいかんによっては、内容は排除されるだけでなく、前景化・背景化されることもありうると考えている。以下、意味論的ブロック理論と論証的ポリフォニー理論を応用して、(1)-(3) の発話の意味の性質を順に記述していくことにする。

## 4. 分析

### 4.1. 例 (1) の分析

さっそく (1) について見ていこう。本稿冒頭で述べたように、(1) の発話のポイントは、側近が落ち込んでいるネガティブな状況を側近が元気いっばいのポジティブな状況として提示する矛盾した内容を主張するふりをする点であった。まず、(1) の発話の意味のうち、内容について見ていこう。(1) の内容は (19) のように記述される。

(1) Vous avez l'air ENTHOUSIASTE, vraiment !

(19) *vous avez de petites mines, et donc vous avez l'air enthousiaste ; ÉNERGIQUE DC ENTHOUSIASTE*

一方で、発話全体が論証的連鎖にパラフレーズされて、*vous avez de petites mines, et donc vous avez l'air enthousiaste* が得られる。発話には現れていないが連鎖には現れている要素 *vous avez de petites mines* は、本稿冒頭に示した新聞記事の前後の文脈 (特に *il a moqué les « petites mines » de ses collaborateurs* の部分) によって与えられている。他方で、表出語 *enthousiaste* が、その意味に含まれる論証的相、例えば *ENTHUSIASTE DC ENCOURAGEANT* を当

該連鎖の解釈として提供する。Bourmayan (2012) が *sans doute p* について *sans doute* は *p* を表出語として導入するマーカであるとしているように、いくつかの統語形式は表出語の存在を知らせる役割を持つと仮定できる。*p avoir l'air q* について *p avoir l'air* は *q* を表出語として導入するマーカであると考えれば、ここでは *enthousiaste* が *q* すなわち表出語にあたる。ところで、(19) の論証的連鎖と論証的相を比較すると、論証的連鎖の左辺に現れている *petites mines* と論証的相の左辺に現れている *ÉNERGIQUE* が矛盾関係にあることが分かる。*petites mines* の意味には *énergique* の意味に含まれる論証的相 *ÉNERGIQUE DC ENTHOUSTIASTE* と矛盾する論証的相 *NEG ÉNERGIQUE DC NEG ENTHOUSTIASTE* が含まれると考えられるためである。なお、*NEG* は論証的否定（談話の方向性を反転させる）の演算子で、*ne...pas, peu, moins* 等の論証的否定マーカの一般化である。つまり、(19) においては、論証的連鎖と論証的相の間に正常な具体化・抽象化の関係が見られず、両者が矛盾関係にある。(19) の論証的連鎖と論証的相の間には、通常の複雑構造には見られない奇妙なギャップがある。次に、(1) の発話の意味のうち、発話態度について見ていこう。談話機能について言うと、(19) は、新聞記事が示しているように、後続の談話の中の « *petites mines* » によって反論され、談話の展開の中で矛盾を引き起こしている。よって、(19) は談話の展開から排除された内容である。観察をまとめると、(1) の発話の論証的内容は奇妙なギャップを含んでおり、これが (1) の発話のアイロニーの原因であると考えられる。ギャップが不合理性にまで達しているため、その帰結として、内容は言説の流れから排除される。なお、(1) と同じ文脈で *vraiment* と感嘆符を取って *Vous avez l'air enthousiaste.* と言ったとしても、依然としてそれをアイロニーだと解釈することができる。このことから、*vraiment* や感嘆符がアイロニーの攻撃性や面白さを強める補助的な役割していると考えられることは可能であるにしても、*vraiment* や感嘆符をアイロニーの本質的な要因だと考えることは不可能であることが分かる。

#### 4.2. 例 (2) の分析

それでは、今度は (2) の発話の意味の性質について見ていくことにする。支持率調査においてオランダを少しは追いつけたのでサルコジが悲しんではいないという状況を、大喜びしている状況として提示する大袈裟な内容を主張するのが (2) のポイントであったことを思い出そう。まず、(2) の内容は (20) のように記述される。

(2) Parfois, il reprend confiance parce qu'à la lecture de certaines enquêtes, il SERAIT BATTU MOINS nettement que prévu.

(20) *parfois, il reprend confiance parce qu'à la lecture de certaines enquêtes, il serait battu moins nettement que prévu* ; NEG BATTU DC NEG DÉÇU

一方で、(2) の発話全体から、論証的連鎖 *parfois, il reprend confiance parce qu'à la lecture de certaines enquêtes, il serait battu moins nettement que prévu* が得られる。他方で、表出表現 *serait battu moins* が、その意味に含まれる論証的相、例えば NEG BATTU DC NEG DÉÇU を当該連鎖の解釈として提供する<sup>6</sup>。p *parce que* q という統語形式においては、*parce que* が q を p の理由そのものとして導入するため、q に相当する部分 (ここでは *à la lecture de certaines enquêtes, il serait battu moins nettement que prévu*) に表出語・表出表現が含まれると考えられるからである。battu と *déçu* との結びつきは、「Boxe : Carlier battu, le

---

<sup>6</sup> *moins* が談話の方向性を反転させる論証的否定のマーカであることは前述したが、ここでは battu に対して働いている。*moins* は Ducrot (1995) の用語に従うと、*atténuateurs* (un peu など) ではなく、*inverseurs* (peu など) に分類される。「ゴドーを待ちながら」で登場人物のポツが葉巻を吸いながら « *La deuxième est toujours moins bonne (il enlève la pipe de sa bouche, la contemple) que la première je veux dire. (Il remet la pipe dans sa bouche.) Mais elle est bonne quand même.* » (Beckett, *En attendant Godot*, Minuit, p. 36) という場面があるが、*Mais elle est bonne quand même.* の *mais* はそれに先立つ談話が論証的に *bonne* の反対であることを証明している。*elle est moins bonne.* は *elle est peu bonne.* あるいは *elle n'est pas vraiment bonne.* と言うのと同様である。

public déçu » (*Le Télégramme*, 30-06-2002) « Roland-Garros : Gilles Simon battu et déçu » (*L'Express*, 01-06-2012) などの用例から確認できる。ところで、(20) の論証的連鎖と論証的相を比較すると、論証的連鎖の左辺の *reprend confiance* が論証的相の右辺の NEG DÉÇU の具体化としては強すぎることに気づく<sup>7</sup>。このことは、Il n'est pas déçu, on peut même dire qu'il reprend confiance. とは言えるが、\*Il reprend confiance, on peut même dire qu'il n'est pas déçu. とは言えないことから確認できる。(20) の論証的連鎖は論証的相に対して強すぎるという関係にあり、正しい具体化・抽象化の関係性が成り立っていない。これらのことから、(2) の発話の論証的意味内容には奇妙なギャップが存在することが分かる。次に、(2) の発話の発話態度について見ていく。論文冒頭に記載した新聞記事が示すように、(2) の話者がその後 « Quand je le vois plastronner, je me dis : “Battons-nous. Rien n'est acquis”. » と続けて (2) の内容を発展させていることから、(2) の内容の談話機能は前景化となる。観察をまとめると、発話の内容における論証的連鎖と論証的相の間の奇妙なギャップが (2) におけるアイロニーの原因であると考えられる。このギャップは不合理性にまでは達しておらず、連鎖が相に対して強すぎるという程度に関するものなので、内容を排除せずに引き受け (*prendre en charge*)、前景化することが可能である。また、(2) から副詞 *parfois* を取っても、依然として (2) を誇張に基づくアイロニーとして解釈することが可能である。このことから、*parfois* がアイロニーの攻撃性や面白さを強める補助的な役割していると考えられることは可能であるにしても、*parfois* をアイロニーの本質的な要因だと考えることは不可能であることが分かる<sup>8</sup>。

---

<sup>7</sup> *reprendre confiance* と *serait battu moins nettement que prévu* はそれぞれサルコジが自信を失ったこと、サルコジの大敗が予想されていたことを前提された内容として伝達するという点で、オランダからサルコジに向けられた言外の批判を構成しているとも言える。

<sup>8</sup> Carel (2016) が (2) の分析について解説しているので紹介する。「Saori Nishiwaki montre que, de manière générale, les énoncés linguistiquement ironiques sont seulement le lieu de décalages bizarres. Une distorsion apparaît chaque fois entre l'enchaînement et

### 4.3. 例 (3) の分析

最後に、(3) の発話の意味の性質について見ていく。(3) のポイントはフェビウスから教わることは何もないという状況を、教わることは多くないという状況として提示する控えめな内容を主張することであった。まず、(3) の発話の論証的内容は、(21) のようになる。

(3) Je n'ai pas beaucoup de leçons de style à recevoir de quelqu'un qui MILITAIT POUR

---

l'aspect qu'il concrétise. Parfois la distorsion va [...] jusqu'à l'absurdité et le contenu est faussement pris en charge. Mais parfois la distorsion est moins forte et le contenu peut être réellement pris en charge, comme dans cet énoncé de François Hollande à propos de Nicolas Sarkozy lorsque ces deux hommes politiques étaient tous les deux candidats en 2012 à l'élection présidentielle – je le cite de mémoire : (58) *Sarkozy reprend courage parce que, selon les derniers sondages, il serait battu moins nettement que prévu*. Je rappelle que Sarkozy était le président sortant. Il était très mal aimé, et tous les sondages étaient en faveur de Hollande. Cependant, vers la fin de la campagne, la cote de popularité de Sarkozy remontait et c'est alors que Hollande a dit (58). (58) est ironique, mais son contenu n'est pas contradictoire. *reprendre courage* est simplement une réaction un peu exagérée : il serait normal que Sarkozy ne soit, du coup, pas trop déçu. Il y a une distorsion entre l'enchaînement évoqué (58') et l'aspect qu'il concrétise : (58') *il serait battu moins nettement que prévu donc il reprend courage* compris comme concrétisant NEG BATTU DC NEG DÉCEPTION (Je rappelle que le « neg » devant BATTU renvoie à la négation argumentative : il peut s'agir de *ne pas être battu, être peu battu, être moins battu que*). Cette distorsion ne va pas jusqu'à être absurde. L'ironie se fonde ici seulement sur une exagération. Nous retiendrons donc de manière générale que les énoncés ironiques ont toujours un contenu distordu. C'est cette propriété argumentative de leur contenu qui les caractérise, et non l'attitude énonciative de leurs locuteurs, qui peut être aussi bien de la vraie prise en charge que de la fausse prise en charge. La distorsion peut tenir à une exagération et le contenu est réellement pris en charge ; la distorsion peut aller jusqu'à la contradiction et le contenu est alors faussement pris en charge. Les cas standards d'ironie, ceux qui sont faussement pris en charge par leurs locuteurs, sont des cas où le décalage est absurde. Comme le montre Saori Nishiwaki, c'est une définition argumentative et non pas énonciative qu'il faut donner à l'ironie. » (Carel, *ibid.*, p.20-21)

## QUE DOMINIQUE STRAUSS-KAHN SOIT ÉLU PRÉSIDENT.

(21) *celui qui me fait la morale a milité pour qu'un violeur soit élu président, et donc je n'ai pas beaucoup de leçons de style à recevoir de sa part ; X EST IMMORAL DC Y REFUSE SES LEÇONS QUE CE SOIT*

一方で、(3) の発話全体をパラフレーズすると論証的連鎖 *celui qui me fait la morale a milité pour qu'un violeur soit élu président, et donc je n'ai pas beaucoup de leçons de style à recevoir de sa part* が得られる。新聞記事の文脈では *violeur* と *Dominique Strauss-Kahn* は類義の表現とみなすことができる。他方で、表出表現 *militait pour que Dominique Strauss-Kahn soit élu président* が、論証的相 *X EST IMMORAL DC Y REFUSE SES LEÇONS QUE CE SOIT* を連鎖の解釈として提供する。この相は *immoral* の意味に含まれると考えられる。新聞記事の文脈では *militait pour que Dominique Strauss-Kahn soit élu président* は *immoral* と類義の表現とみなすことができる。ところで、(21) の論証的連鎖と論証的相を比較してみると、論証的連鎖の右辺 *je n'ai pas beaucoup de leçons de style à recevoir de sa part* が論証的相の右辺 *X REFUSE SES LEÇONS QUE CE SOIT* に対して弱すぎるということが分かる。*Je n'ai pas beaucoup de leçons de style à recevoir de sa part, on peut même dire que je refuse ses leçons que ce soit.* とは言えるが、\**Je refuse ses leçons que ce soit, on peut même dire que je n'ai pas beaucoup de leçons de style à recevoir de sa part.* とは言えない。(21) の論証的連鎖と論証的相の間には正常な具体化・抽象化の関係ができておらず、論証的連鎖が論証的相に対して弱すぎるという奇妙なギャップが存在している。次に、(3) の発話の発話態度を見ていこう。冒頭で見たように、新聞記事は « *relevait Sarkozy, s'attirant en réponse un « bravo pour votre élégance » de la part de Fabius.* » で終わっているので、話者は (3) の内容を展開してもいないが、(3) の内容は談話の中で矛盾を引き起こしてもいないので、背景化されていると言える。観察をまとめると、(3) の発話の内容においては、論証的連鎖が論証的相に比べて弱すぎるという奇妙なギャップが存在しており、これがアイロニーの原因であると考えられる。このギャップはあくまで程度のずれであり矛盾には達していないので、話者は内容を排除せずに引き受け、背景化することが

可能である。

本稿の問いは、(1)-(3)の発話の間に存在する言語学的類縁性をどう記述すべきかというものであった。全体の分析をまとめると、発話態度については、排除、前景化、背景化と三者三様であるものの、内容については論証的連鎖と論証的相の間に奇妙なギャップを含むという共通点があった。よって、論証的内容における奇妙なギャップこそ、(1)-(3)の発話の間に存在する言語学的類縁性であると考えられる。

## 5. 結論：発話態度の性質によるアイロニーの定義から、内容の性質によるアイロニーの定義へ

本稿の分析からどのような言語学的帰結が得られるだろうか。冒頭で述べたように、フランスでは、伝統的に話者が内容に対して距離を取るという発話態度の性質がアイロニー発話を生じさせると考えられている。分析結果を鑑みると、アイロニー発話を生じさせるのは、むしろ反対に、論証的連鎖と論証的相の間に奇妙なギャップが存在するという内容の性質であるように見える。発話態度の性質（内容が排除されるかどうか）は、内容の性質（ギャップが矛盾にまで達しているか否か）に応じて変化する。アイロニー発話という現象の中心にあるのは内容の性質であり、発話態度の性質は内容の性質の帰結でしかない。アイロニー発話の本質は、発話態度の特徴ではなく、内容の特徴にある。(1)のような話者が内容を排除するタイプの例のみをアイロニー発話とし、(2)や(3)のような話者が内容を排除しないタイプの例はアイロニー発話ではないと主張したとしても、両者の間に感じられる類縁性を説明できないという問題が依然として残る。本稿の分析では、(1)のように話者が内容を排除する典型的なケースだけでなく、(2)や(3)のように話者が内容を排除しない非典型的なケースもまとめて説明することが可能であり、より一般的で有効であると言える。これらのことは、発話態度の性質によるアイロニーの定義から、内容の性質によるアイロニーの定義に移行していく必要性を示唆している。とはいえ、矛盾する、強すぎる、弱すぎるというギャップをまとめて奇妙なギャップと形容しただけでは、アイロニー発話

の定義としては不十分で、否定と程度の間には存在する親近性を説明する必要がある。現時点の Carel の理論においては、それを可能にする理論的道具立てが欠けている。しかしながら、否定と程度の親近性は、否定文と比較文の比較研究、ラテン語の *magis* (plus) からフランス語の *mais* に至る意味の変遷の研究など、アイロニー発話以外の言語現象においても多く観察されている言語的事実である。否定と程度の親近性を説明することができるような方向へと Carel の理論を発展させていくことは言語学的に実り多い結果をもたらすであろうと考えられる。

## 引用文献

Anscombe, J.-Cl. et Ducrot, O. (1983) *L'argumentation dans la langue*, Bruxelles, Mardaga.

Bourmaysan, A. (2012) « Doute, certitude ou vérité restreinte ? Les paradoxes de la valeur sémantique de *sans doute* » dans M. Carel (ed.), *Argumentation et polyphonie*, Paris, L'Harmattan, 59-82.

Carel, M. (2011a) *L'entrelacement argumentatif*, Paris, Honoré champion.

Carel, M. (2011b) « Ironie, paradoxe et humour » dans M. D. Vivero García (ed.), *Humour et crises sociales*, Paris, L'Harmattan, 57-74.

Carel, M. (2015) « Pour une analyse argumentative de l'ironie », communication au séminaire *Axiologie, ironie et littérature*, Paris, EHESS.

Carel, M. (2016) *Quatrième conférence*, manuscrit.

Ducrot, O. (1984) *Le dire et le dit*, Paris, Minuit.

Ducrot, O. (1995) « Les modificateurs déréalisants » *Journal of Pragmatics*, 24, 145-165.

Ducrot, O. (2010) « Ironie et négation » dans V. Atayan et U. Wienen (eds.) *Ironie et un peu plus*, Berne, Peter Lang, 169-179.

Fontanier, P. (1827 / 2009) *Les figures du discours*, Paris, Flammarion.

西脇沙織 (2015) 「反語法を用いたアイロニーと誇張法を用いたアイロニー : 意味論的ブロック理論による説明」川口順二編『フランス語学の最前

線 3』 ひつじ書房, 305-327.

Nishiwaki, S. (2015) « Analise argumentativa da ironia standard et da ironia nao-standard » *Letras de Hoje*, 50-3, 287-293.

Nishiwaki, S. (2016a) « Analyse argumentative de l'ironie standard et de l'ironie non-standard » 大久保朝憲・川島浩一郎・酒井智宏・渡邊淳也編『フランス語学研究』50号別冊論文集『パロールの言語学』, 103-118.

Nishiwaki, S. (2016b) *Ironie et argumentation*, thèse de doctorat, Paris, EHESS.

Sperber, D. et Wilson, D. (1978) « Les ironies comme mentions » *Poétique*, 36, 399-412.

Sperber, D. et Wilson, D. (1986 / 1995<sup>2</sup>) *Relevance: communication and cognition*, Blackwell, Oxford, trad. fr. de A. Gerschenfeld et D. Sperber (1989) *La pertinence : communication et cognition*, Paris, Minuit.